

幼稚園教諭・保育士に求められるピアノ技能について
－園長への調査結果に基づいて－

Piano playing skills required for preschools and nursery teachers :
An analysis of principals' responses to a questionnaire

和田垣 究, 生地 加代, 藤谷 智子, 澤田 和夫

WADAGAKI Kiwamu, IKCHI Kayo, FUJITANI Tomoko, SAWADA Kazuo

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

幼稚園教諭・保育士に求められるピアノ技能について
—園長への調査結果に基づいて—

Piano playing skills required for preschools and nursery teachers :
An analysis of principals' responses to a questionnaire

和田垣究* 生地加代** 藤谷智子** 澤田和夫***

WADAGAKI, Kiwamu* IKCHI, Kayo** FUJITANI, Tomoko**
SAWADA, Kazuo***

キーワード：弾き歌い コード伴奏 歌唱力

1. 研究の目的

本学科の幼稚園・小学校教員養成課程における音楽関係の科目は、これまで小学校教諭免許に関しては教科音楽、教科器楽、音楽科指導法、及びそれ以外のピアノ科目として開講してきた。また、幼稚園教諭免許に関しては、教科器楽、教科音楽やその他幼稚園教諭・保のピアノ科目を開講し、保育内容・表現の領域の指導のための基礎という意味合いをも持つ科目を開講してきた。

平成 31 年度から施行される教育職員免許法では、小学校音楽科については、教科目標及び各学年の目標は、他の教科と同様に、「知識及び技能」の修得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養の観点から整理され、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、音楽活動に取り組むようにする必要があると、「音楽づくり」の活動の充実が強調されている（宮崎¹⁾, 2017）。また、幼稚園教諭養成課程においては、科目区分が大きく変わり、これまでのような教科としてではなく、「領域に関する専門的事項」という科目区分の中に位置づけられることとなった。そのため、本学科では「子どもと音楽表現」として開講する予定である。また、保育内容・表現に関しても、従来よりも保育指導法を強調した内容になる予定である。

そうした中で、学生にどのような音楽の力を培うことが望ましいのか、また幼児・児童の音楽表現を高めることができる力量をどのように育成したら良いのか、新たな時代の教員養成の音楽関連の科目をいかに構成するのかについて、検討する必要があると感じている。もちろん、これまでも科目目標から授業を構成するだけでなく、学生のピアノ関連の経験についての実態を踏まえながら授業を改善しつつ授業を構成してきたが、免許法の改正と相まって、この機会にその方向性を確認しておく必要がある。

ピアノ科目の授業内容を検討するにあたって、主な論点は次のようなものである。

(1) 学生時代に修得しておくべきピアノ技能をどの程度に設定したらよいのか。

かつては、難しい曲が弾けるようになるよう順次レベルを上げていくような指導を行っていたが、現在ではコードネームを用いた伴奏なども指導し、臨機応変に子どもの表現活動に対応できる力を育成するような授業を行っている。曲のレベルとしては、どのあたりを想定したら良いのか。

* 教育学科准教授 ** 教育学科教授 *** 教育学科非常勤講師

(2) 歌唱の伴奏の技術については、コードネームを用いた伴奏を重視すべきか、あるいは楽曲通りの伴奏ができることを重視すべきか。また、即興演奏の技能はピアノ技能の高さとどのように関連しているのか。

どちらの力も持っていることが望ましいが、限られた時間の中で学生の力を高めていくには、どちらに軸足を置くべきなのかということは大きな課題である。ピアノ技能のレベルアップと同時に、指導過程の中での比重の置き方の変化も検討すべき事柄である。

(3) 弾き歌いにおいては、歌唱力と伴奏力のどちらに比重を置くべきなのか。

この論点についても、上記の点と同じように、どちらも重要であるが、1つの科目の中でということだけでなく、複数の科目の指導を通して、総合的に考察していく必要がある。

これらのことを検討するためには、指導要領等から読み取ってだけでなく、幼児教育の現場で実際にどのような音楽に関する資質能力が求められているのかを知ることや、学生のピアノ技術の実態や認識をも踏まえる必要がある。

そこで、本論文では、幼児教育・保育の現場で活躍してきた、そして、教員を指導する立場にある幼稚園園長の意見を質問紙調査によって把握し、考察していくことを目的とする。具体的な質問項目は、上記の論点をめぐる内容とし、調査結果と現在の指導内容を比較しながら考察をしていくこととする。

II. 研究の方法

7月初旬に大阪市立幼稚園長会において、大阪市立の54園の園長にアンケートを配布した。筆者らの1人である澤田から大阪市立幼稚園長会に依頼し、調査を引き受けていただいた。回答締め切りは7月31日とし、54園中41園からの回答を得た。従って回答率は76%であった。

III. 結果と考察

(1) 質問①から⑤における結果と考察

①「学生時代に修得しておくべきピアノ技能はどのレベルまでが必要だと感じますか？」

表1 学生時代に修得しておくべきピアノ技能

ピアノ技能	バイエル修得レベル (初級)	ブルグミュラー25の練習曲修得レベル (中級)	ソナチネ・ソナタ修得 レベル (上級)	それ以上
回答	0%	65%	32%	3%

半数以上である65%の園長が、ブルグミュラー25の練習曲修得程度のピアノ技能が必要と回答しており、バイエル修得レベル0%、ソナチネ・ソナタ修得レベル32%、それ以上3%、という結果であった。

授業担当者もピアノ技能修得レベルとしては同様に考えており、そのようなカリキュラムを組み指導している。しかし園長の自由記述欄を読むと、我々が考えるブルグミュラー25の練習曲修了程度のレベルと園長の考えるブルグミュラー修了程度のレベルとは、少し意味合いに違いがあることも示された。

以下は、「ブルグミュラー25の練習曲修了レベル」と回答した園長の自由記述欄への記載である。

- ・希望としては、学生時代にソナチネ・ソナタ以上のピアノ技能を修得しておいてほしい。
- ・現場に出てから自分で練習し、さらに上達することを前提にこのレベルと回答した。
- ・ピアノ技能は高ければ高いほど良い。最低ラインがブルグミュラー25の練習曲修了レベルである。

筆者らは、ピアノ技能についてはブルグミュラー25の練習曲を修得していれば保育に概ね支障はないと考えていたのだが、それは最低レベルであり、本来は学生時代にもっと高いピアノ技能を身につけてほしいというのが園長の本音のようである。また、ソナチネ・ソナタ修了レベルと回答した園長の自由記述欄には、「ピアノ技能をきちんと身につけた上で保育にあたるのが大切だと思う」「ブルグミュラー25の練習曲修了レベルでも大丈夫かもしれないが、子どもの表現力を引き出すには、やはり不十分な実力だと思う」という記載があった。

②「歌の伴奏についてはどちらがより必要だと感じますか？」

表2 伴奏における重要度（コード伴奏か楽譜通りか）

伴奏の重要度	コードネームを用いた伴奏（和音中心の伴奏）	どちらかといえばコードネームを用いた伴奏（和音中心の伴奏）	どちらかといえば楽譜通りの伴奏	楽譜通りの伴奏
回答	0%	12%	70%	18%

70%の園長が、どちらかといえば楽譜通りの伴奏と回答し、18%の園長が楽譜通りの伴奏と回答している。コードネームを用いた伴奏と回答した園長は1人もおらず0%、わずかに12%の園長がどちらかといえばコードネームを用いた伴奏と回答している。筆者らの予想と大いに違った結果であった。

以下が、「どちらかといえば楽譜通りの伴奏」「楽譜通りの伴奏」と回答した園長の自由記述欄への記載である。

- ・伴奏も含めて作曲者の作品に対する解釈が反映されているので、楽譜通りに弾くのが基本だと思う。
- ・伴奏によって歌のイメージが変わる。作曲者の思いやイメージ、伝えたいことは楽譜に表現されているので、楽譜通りの伴奏で弾くべきだと思う。
- ・音楽性を高めるという点においては楽譜通りに弾けた方が良い
- ・楽譜通りの方がその曲に合った伴奏である。

園長の、子どもの歌への限りない愛情を感じるとともに、作曲者が伝えたかった歌のイメージを何としても子どもたちへ伝えたいという強い思いも感じる結果である。

どちらかといえばコードネームを用いた伴奏、と回答した園長の自由記述欄には、「弾けるなら楽譜通りの伴奏の方が良いが、余裕がなければコード伴奏でも良いと思う」や「最近は楽譜の読めない人もいるので仕方がないと思う」という内容の記載があり、それらを読む限りでは、楽譜通り弾く方が望ましいが無理ならコード伴奏でも良い、という消極的な回答の可能性が高い。

③「子どもの動きを導く、また動きに合わせる演奏や動物を表現するような即興演奏はピアノレベルの高い人の方が低い人より優れていると感じますか？」

表3 即興演奏とピアノ技能の高さ

ピアノ技能の高さ	より優れていると思う	やや優れていると思う	あまり関係ないと思う	全然関係ないと思う
回答	43%	47%	10%	0%

90%の園長が、「より優れていると思う」(43%)、「やや優れていると思う」(47%)と回答している。「全然関係ないと思う」と回答した園長は0%であり、「あまり関係ないと思う」と回答した園長はわずかに10%であった。

「より優れていると思う」と回答した園長の自由記述欄への記載は以下のとおりである。

- ・ピアノ技能レベルが高ければ、表現の幅も広がる。
- ・ピアノ技能が高いと子どもがスムーズに動く。
- ・ピアノ技能レベルが低いと、自分の抱いたイメージで弾けないもどかしさがある。
- ・リズムカルで美しい音で弾くことは、子どもたちの感性を磨くと思う。

「やや優れていると思う」と回答した園長の自由記述欄への記載は以下のとおりである。

- ・ピアノ技能が高い人は上手に伴奏を弾くが、即興演奏となるとその人の感性も関係してくるので一概には言えないと思う。
- ・ピアノ技能が高い人は色々なフレーズや音を出せると思うが、経験を積んでいけばピアノ技能レベルがそれほど高くなくても子どもの動きに合わせた即興演奏は出来るようになると思う。
- ・ピアノ技能だけの問題ではなく、表現力やイメージ力が大切だと思う。
- ・ピアノ技能だけではないと思う。子どもを感じる力、合わせる力、動かせようとする力がより必要だと思う。

以上の結果から見えてくることは、まず筆者らが思っている以上に園長はピアノ技能レベルの高さを必要としていることである。しかし、「やや優れていると思う」と回答した園長の自由記述から、ピアノ技能レベルだけでなく、表現力や子どもの動きに合わせた演奏の重要性も指摘されているように、ピアノ技能レベルを高めるだけの教育では不十分であると考えられる。保育者は高いピアノ技能を持った上で、自らの感性や表現力を磨き、経験を積み、子どもを見る力を養っていく必要があり、大学の教員養成課程ではそれらの基盤となる力を培っていくことが求められる。

④「大学では、ピアノ教則本（バイエルやブルグミュラー等）を使ってピアノ技能を高める授業と子どもの歌の伴奏付けの授業とではどちらが重要だと思いますか？」

表4 授業における重要度（ピアノ技能か伴奏付けか）

授業の重要度	歌の伴奏付けの授業の方が重要	歌の伴奏付けの授業の方がどちらかといえば重要	どちらの授業も同じくらい	ピアノの技能を高める授業の方がどちらかといえば重要	ピアノ技能を高める授業の方がより重要
回答	5%	17%	70%	5%	3%

70%の園長が、「どちらの授業も同じくらい重要」と回答している。「歌の伴奏付けの授業の方が重要」「歌の伴奏付けの授業の方がどちらかといえば重要」と回答した園長は全体の22%（内訳は表4

のとおり)、「ピアノ技能を高める授業の方がどちらかといえば重要」「ピアノ技能を高める授業の方がより重要」と回答した園長は全体の僅か8% (内訳は表4の通り)であった。

現在のピアノ科目については、従来のピアノ技能に特化した授業内容から徐々に弾き歌いの授業を重視した授業内容にシフトさせ、現場での対応力強化に力を注いでいる。どちらの授業も同じぐらい重要という回答は予想通りであり、また現在の授業内容を肯定することになる結果である。

以下は、「歌の伴奏付けの授業の方が重要」「歌の伴奏付けの授業の方がどちらかといえば重要」と回答した園長の自由記述欄への記載である。

- ・子どもに歌う楽しさを感じさせることが重要だと思う。
- ・実践にすぐ必要だから。
- ・歌うことから感性が育つ、歌わせることはとても重要だから、まずは弾き歌いを中心に授業してほしい。

以下の記載は、「ピアノ技能を高める授業の方がどちらかといえば重要」「ピアノ技能を高める授業の方がより重要」と回答した園長の自由記述欄への記載である。

- ・伴奏は、その歌をいちばん美しく、また歌いやすく考えられている。楽譜通りに弾くことができるよう、ピアノ技能の向上の授業が一番大切だと思う。
- ・歌の伴奏付けについては、現場でもスキルを高めることができるが、基礎的なピアノ技能は大学の授業でしっかりと教えておいてほしい。
- ・ピアノ技能があればアレンジできる。

自由記述欄からは、園長の中には「子どもに歌を歌わせる保育をととても重要、且つ大切に考えている」という例も2割程度存在する。「弾き歌いの授業の方がより重要」「どちらかといえば重要」と回答したものには伴奏についての記載はなかった。ピアノ技能を高める授業の方がどちらかといえば重要、ピアノ技能を高める授業の方がより重要と回答した園長らは、伴奏を非常に大切と考えていることがうかがえる。

現在のカリキュラムでは、保育現場ですぐに役立つよう、初心者やピアノの苦手な学生には簡易伴奏(コードネームによる伴奏)を中心に指導している。コードネームによる伴奏を基礎としつつも、ピアノ技能に裏付けされた伴奏もできるようにレベルアップをはかる必要性も考えられる。伴奏についての指導は今後も検討を重ねながら改善していく必要があるだろう。

⑤弾き歌いでは歌唱力と伴奏力のどちらがより重要だと感じますか?

57%の園長が、「どちらも同じぐらい重要」と回答している。「歌唱力がより重要」「どちらかといえば歌唱力が重要」(内訳は表5の通り)と回答した園長は全体の23%、「伴奏力が重要」と回答した園長は1人もおらず0%、「どちらかといえば伴奏力が重要」と回答した園長は全体の13%であった。58%の「どちらも同じぐらい重要」の回答率は予想より少なく、「歌唱力がより重要」「どちらかといえば歌唱力が重要」の回答率が29%あり、筆者らが予想したより多かった。

表5 弾き歌いにおける重要度(歌唱力が伴奏力か)

弾き歌いの重要度	歌唱力がより重要	どちらかといえば歌唱力が重要	どちらも同じぐらい重要	どちらかといえば伴奏力が重要	伴奏力がより重要
回答	7%	23%	57%	13%	0%

以下が、「歌唱力がより重要」、「どちらかといえば歌唱力が重要」と回答した園長の自由記述欄への記載である。

- ・保育者の歌声をまねて子どもは歌うことが多い。
- ・子どもに歌を教えるとき、伴奏は簡易でも良いが歌唱力は絶対に必要。
- ・伴奏なしでも、しっかりと正しく歌えることが大切。
- ・歌のメロディとリズムさえしっかりしていれば、子どもは歌うことができると思う。

弾き歌いにおいては、歌唱力と伴奏力、どちらも同じぐらいに重要と考え授業を行っている。ピアノ科目以外にも歌唱を中心とした音楽科目があり、学生の歌唱力を高める授業と弾き歌いの授業を通して、総合的に学生の弾き歌いの力を伸ばしていきたいと考える。

(2) 質問①の学生時代に修得しておくべきピアノ技能のレベルと、質問②から質問⑤の回答の関連性

表 6 修得しておくべきピアノ技能と伴奏の関連性

	コードネームを用いた伴奏 (和音中心の伴奏)	どちらかといえばコード ネームを用いた伴奏(和 音中心の伴奏)	どちらかといえば楽譜通 りの伴奏	楽譜通りの伴奏
バイエル修得レベル(初級)	0%	0%	0%	0%
ブルグミュラー25の練習曲 修得レベル(中級)	0%	12%	69%	19%
ソナチネ・ソナタ修得レベル (上級)	0%	15%	70%	15%
それ以上	0%	0%	100%	0%

修得しておくべきピアノ技能を「ソナチネ・ソナタ修了程度」と回答した園長の85%が「楽譜通りの伴奏」「どちらかといえば楽譜通りの伴奏」と回答(内訳は表6の通り)するのは予想したとおりである。しかし、「ブルグミュラー25の練習曲修了程度」と回答した園長の88%が、「楽譜通りの伴奏」「どちらかといえば楽譜通りの伴奏」と回答(内訳は表6の通り)しているのは注目すべき点である。

果たして、ブルグミュラー25の練習曲修了レベルで楽譜通りの伴奏が弾けるのかどうか、個人差はあるにせよ指導者としては確信の持てないところである。なぜなら、大学入学までにピアノの経験のない学生もおり、わずかな時間でそこまでの技能を修得させることが難しいからである。だからこそ、コードネームを用いた伴奏から順次技能を高めていくことが重要と考えられる。

表 7 修得しておくべきピアノ技能と即興演奏の関連性

	より優れていると思う	やや優れていると思う	あまり関係ないと思う	全然関係ないと思う
バイエル修得レベル(初級)	0%	0%	0%	0%
ブルグミュラー25の練習曲 修得レベル(中級)	46%	42%	12%	0%
ソナチネ・ソナタ修得レベル (上級)	38%	54%	8%	0%
それ以上	0%	100%	0%	0%

修得しておくべきピアノ技能レベルを「ソナチネ・ソナタ修了レベル」と回答した園長の92%が「ピアノ技能の高い人の方がより優れていると思う」「やや優れていると思う」（内訳は表2の通り）と回答している。また、修得しておくべきピアノ技能レベルを「ブルグミュラー25の練習曲修了レベル」と回答した園長の88%が「より優れていると思う」「やや優れていると思う」（内訳は表2の通り）と回答しており、「あまり関係ないと思う」と回答した園長はわずか12%であった。やはり、ピアノ技能の高さと即興演奏とはかなりの関連性があると現場の園長が認識していることがわかる。

表8 修得しておくべきピアノ技能と授業における重要度の関連性

	歌の伴奏付の授業の方が重要	歌の伴奏付の授業の方がどちらかといえば重要	どちらの授業も同じくらい	ピアノの技能を高める授業の方がどちらかといえば重要	ピアノ技能を高める授業の方がより重要
バイエル修得レベル（初級）	0%	0%	0%	0%	0%
ブルグミュラー25の練習曲修得レベル（中級）	4%	15%	73%	4%	4%
ソナチネ・ソナタ修得レベル（上級）	8%	23%	61%	8%	0%
それ以上	0%	0%	100%	0%	0%

ブルグミュラー25の練習曲修得レベルと回答した園長の73%、「ソナチネ・ソナタ修得レベル」と回答した園長の61%が、「どちらの授業も同じくらい重要」と回答している。注目すべき点は、「ソナチネ・ソナタ修得レベル」と回答した園長の31%が、「歌の伴奏付けの授業の方が重要」（8%）、「歌の伴奏付けの授業の方がどちらかといえば重要」（23%）と回答していることである。「ピアノ技能を高める授業の方が重要」と回答した園長は0%、「ピアノ技能を高める授業の方がどちらかといえば重要」と回答した園長は僅か8パーセントであった。

ピアノ技能の高さは当然のこととして、歌の伴奏付けの技量も磨いてほしいと現場の園長が認識していることが示された。高いピアノ技能を求めつつ、同時に、歌の伴奏もしっかりとできる保育者を養成してほしいというのが現場の園長の要望であるといえる。

「ブルグミュラー25の練習曲修得レベル」と回答した園長の61%、「ソナチネ・ソナ修得レベル」と回答した園長の46%が、どちらも同じくらい重要と回答している。また、「ソナチネ・ソナタ修得レベル」と回答した園長の39%が、「歌唱力がより重要」「どちらかといえば歌唱力が重要」と回答しており、「ブルグミュラー25の練習曲修得レベル」と回答した園長の27%を11%ほど上回っている。ピアノ技能としてソナチネ・ソナタ修得レベルを求め、なお且つ、弾き歌いにおいては歌唱力を重視するという結果である。ピアノ技能の高さは当然のこととして、それに加えて歌唱力にも力を注いでほしいという園長の願いが伺われる。

表9 修得しておくべきピアノ技能と弾き歌いにおける重要度の関連性

	歌唱力がより重要	どちらかといえば歌唱力が重要	どちらも同じくらい重要	どちらかといえば伴奏量が重要	伴奏力がより重要
バイエル修得レベル（初級）	0%	0%	0%	0%	0%
ブルグミュラー25の練習曲修得レベル（中級）	8%	19%	61%	12%	0%
ソナチネ・ソナタ修得レベル（上級）	8%	31%	46%	15%	0%
それ以上	0%	0%	100%	0%	0%

IV. 総合的考察

結果および考察では、個々の質問項目に対する結果について、現在の指導と関連づけながら考察してきた。ここでは、それらを総合して、研究目的において論点としてあげた3つの項目について考察を述べていくこととする。

(1) 学生時代に修得しておくべきピアノ技能をどの程度に設定すればよいのか。

ピアノ技能の難易度としては、本学科で到達目標として考えてきたブルグミュラー25の練習曲修得レベルで良いであろう。現場の園長の中でも、この回答が一番多かったからである。しかし、そのピアノ技能が子どもの表現活動を引き出し、高めることにつながるようにしていかなければならない。

(2) 歌唱の伴奏の技術については、コードネームを用いた伴奏を重視すべきか、あるいは楽曲どおりの伴奏ができることを重視すべきか。また、即興演奏のためのピアノ技能と通常のピアノ技能とでは、どちらを重視すべきなのか。

園長の自由記述を詳細に見ていくと、歌唱伴奏の技術、そして即興演奏のためのピアノ技能と通常のピアノ技能双方は、どちらを重視すべきか否かではなく、臨機応変に対応を考慮していくことが求められるということである。つまり、ピアノ技能レベルだけではなく、子どもの活動への共感を基に、それに合わせた演奏の技能が求められていることがわかる。その点からも、大学の教員養成課程においては、それらの力の基盤となるものを培っていくことが求められていると言えよう。指導内容を組み立てていく場合には、単なる比重ということの内容を決定していくのではなく、個々の学生に配慮した内容や、指導過程における比重の移動などを考えていかなければならない。

(3) 弾き歌いにおいては、歌唱力と伴奏力のどちらに比重を置くべきなのか。

この点に関しては、今後、学生の実態や認識の調査を実施し、ピアノの科目を含めた音楽関連の科目について、到達目標や指導の概要をさらに検討していく予定である。1つの科目だけでというよりは、複数の科目での到達目標や指導内容の調整が必要となる。歌唱だけ、ピアノだけというのではなく、弾き歌いを筆頭に、教科音楽や音楽科指導法などとも連携して指導する必要があると考える。

【付記】

アンケートの調査については、調査結果の使用について個人が特定されない配慮を十分に行った上で公表することを書面と口頭で説明し、同意を得て行った。

注・引用文献

- (1) 宮崎新悟「新学習指導要領における指導と評価(1) 小学校音楽科」『日本教育評価研究会 指導と評価』第63巻 7月号, 2017, pp.64-71.